再嫁セズシテ、能ク其舅姑及ビ遺兒ヲ孝養愛育シタルガ如キ特殊ノ例ヲ收載シタリ、

名稱

〔伊呂波字類抄天登字〕貞潔　貞賢　貞女

〔辨名上〕節儉二則

節者禮義之節也、○中略自有聖達節次守節之言、而後世遂有節士節婦之稱、以命其人之德已、

〔倭訓栞前編三十〕みさを　操をよめり、後拾遺集に、衣かくる竿に寄たり、躬竿の義にて、操行の直立せるをいふにやといへり、莊子に、津人操舟若神といへるによりて、水棹より出たるにや、千字文には、節義の字を訓じ、靈異記に、風聲又氣調をよみ、日本紀に孝もよめり、

解說

〔運歩色葉集天〕貞女不見兩夫

〔史記八十二田單〕王蠋曰、忠臣不事二君、貞女不更二夫、齊王不聽吾諫、故退而耕野、

〔女大學〕一婦人は別に主君なし、夫を主人とおもひ、敬ひ愼みて事べし、輕め侮るべからず、總じて婦人の道は人に從ふにあり、夫に對するに顏色言葉づかひ慇懃に謙り、和順なるべし、不忍にして不順なるべからず、奢て無禮なるべからず、是女子第一の勤也、夫の敎訓あらば、其仰を叛べからず、疑敷事は夫に問て、其下知に從ふべし、夫問事有ば、正しく答ふべし、其返答疎なるは無禮也、夫若腹立怒る時は、恐れて順ふべし、怒り諍ひて、その心に逆ふべからず、女は夫を以て天とす、返返も夫に逆ひて、天の罰を請べからず、

〔比賣鑑述言四〕貞心をまもる事、女のつねの道ぞとは、大やうたれもふみしる事といへども、つゆ心にかゝる事なきまでに、一生まもりなす事はいとやすからぬわざなるべし、白樂天が詩に、君が一日の恩のために、妾が百年の身をあやまると作り、女論語のことば、一行失あれば、百行なる事なしといへり、へだてゝもへだつべく、つゝしみてもつゝしむべきは、男女のあひだ、嫌疑のさかひなるべし、